

日本数学協会

第23回(臨時)総会議事録

1. 日 時 2024年3月17日(日)午後13時~14時50分
2. 場 所 オンライン開催(Zoom 中継)
3. 会 員 数 383名(2024年3月17日現在)
4. 出席者数 91名(うち委任状 56名)
5. 議事経過 事務局より、出席者数が会則第20条で規定している定足数(会員の5分の1以上)に達しており、本総会が有効に成立した旨の報告があった後、会則第19条第1項の規定により、上野健爾会長が議長となり、本総会を進行する旨の宣言がされた。
上野議長から開会挨拶があった後、本総会の議事録署名人に、寺尾敦氏と森田康夫氏を指名し、議事に入った。

6. 議 題

- (1) 2023年度事業活動の中間報告・同収支決算の中間報告について
事務局より資料に基づき一括して説明された。要約は以下のとおりである。
 - ・幹事会が例年に比べ3倍多く開催され議論を重ねたこと
 - ・Zoom 講義や数学文化公開講演会などを年間25回開催したこと
 - ・総会や年次大会で地方や支部活動の活性を目的とした交流促進を行ったこと
 - ・編集委員会の委員長交代後は目標どおりのペースでニュースレターが発行され、内容は特集記事が組まれるようになったこと
 - ・収支中間報告書では、今年度の期末においても正味財産期末残高は残る見込みだが、予算どおりの事業活動が行われていればマイナスになっていた可能性があったこと

<上野議長からの補足説明要旨>

- ・今年度は、年次大会は実施できた、Zoom 講義も話題を広くできたが、数学文化と会報に変わる位置づけのニュースレターを軌道に乗せることが遅れたなど、その他の活動が殆ど何もできなかった。
 - ・経費節減対策で連絡手段を電子メールに切替えたかったが、半数近くの会員が郵送のままになっていることは誤算だった。このままではいずれ赤字なるのは時間の問題である。
 - ・活動を何もしなければ基本出費のみで財産は残ることが収支の中間報告を見れば分かるが、活動しない訳にはいかず、赤字になれば大変なことになる。
- (2) 2024年度以降の事業活動(方針案)について
上野議長より資料に基づき一括して説明し、会員に意見を求め質疑応答や意向の確認をした。
そして、今回の方針案に沿って幹事会で2024年度以降の事業活動計画を具体的にまとめ、2024年度の総会で議案を決議することで承認された。

＜上野議長からの説明要旨＞

- ・今年度は、ホームページを充実させようとか、会報を数学文化に変わるものにできないかとか、いろいろ試み少しずつやることになったが、実際にやり始めて分かったことは結局個人に非常に負担が掛かってくるということ。
数学文化やニュースレターなどの準備や作業は一部の幹事が負担をし、公・私時間を割いて行ってきた。こういう事を続けては長続きすることはできない。
- ・役員を世代交代して若い方に活動してもらおうとしたが、大学では忙しくて自分の研究をする時間もなくなっている上に、協会の活動までしてもらうことが非常に難しい。
- ・今年度みたいに本質的な活動が何もできないと会員は協会に入っているメリットがなく、会員が減っていき、ますます活動を維持することが困難になり、いずれは財政が破綻する。

＜会員から述べられた意見の要旨＞

- ・解散清算時に財産が足りなくなることを避けないとならない。
- ・説明を聞き残念ではあるが解散は止むを得ないことなのだと思う。
- ・日本数学協会〇〇支部とか、Zoom 講義とか何かしら継続して残ることは賛成である。
- ・連絡方法が郵送を止め全て電子メールだけになることは止むを得ないことなのだと思う。
- ・過去の数学文化を電子化して販売してはどうか。⇒検討したが著作権の問題で断念した。
- ・若い世代の会員が少ない、Facebook など SNS を利用して縮小後も協会を盛り立てるのはどうか。
- ・SNS の活用とか協会として何かを残していくことは大事なことだが、それを望むとき、自分は〇〇をやると名乗りを挙げてもらわなければ、結局は今までどおり一部の幹事や事務局に負担が掛かるのではないのでしょうか。

以上の決議をもって上野議長が閉会を宣し、第 23 回(臨時)総会を終了した。

上記の決議を明確にするため本議事録を作成し、議長および議事録署名人は次に記名押印する。

2024 年 3 月 18 日

日 本 数 学 協 会

議 長 上 野 健 爾



議事録署名人 寺 尾 敦



議事録署名人 森 田 康 夫

